





文庫 20  
153



角田川



田云連歌之道中古為母とて皆  
 歌よしくし作何甚此法哉仲古と  
 系何れの代と云々と云々し其外  
 亦當なり事能くし月法經  
 此とくさしに云々し其外  
 云々云連歌之事たし云々し二つよ  
 きてと此句下此句とす新めく書







自此程と長きことわめて初めに  
等しく御書のみ多く傳ふるは  
其書此書なるの程よきけり一句は  
去程のたもを傳へたるもや侍もや  
て存用初一人の如く記して天下皆  
是程なることさよふは教書よ  
及もやあまの一句と存しむら初め  
第一大書なる句侍も千はれは用初  
の句はあまの句侍も千はれは用初

なと存すことさよふは教書よ  
亦及るはれは初身よことさよふは  
世と存侍も此の句はあまの句  
林打存すと云へり用初はな  
あまの句分多く傳ふるは初め  
はと中古と存するは初めと云へり  
宗初流下け遠北明流あまの古中  
古と云へり用初は教書よ初めは  
しと云へり用初は初めと云へり











なるべし又

三才報とやら凡そ身よりして名前の御礼

すまはぬは芽が芽あたけ又月ととる心

に有歸のきけも無念作力にひく

とあるは有報とれたけをりし後ひあは

まらしてこ有はすこわくぬを付作り又

うらまに御風をこし旅持て衣るこまの味とあは

げ、身を何方がし付て無念作り又

むこれ海のにこしあはいさらるる雲の釣舟のこ

け、身を皆水色に縁を物にこく何事そ

こよりして付作り又、是れ身をたとい身

こ、心合念たあしのかうなる身、只心此

あらしと能くもあふして神こ、身をた

所、流んこ、之、実念の類甚快有り

御、病のゆ、あ、さ、ら、は、屋、上、の、麻、を、と、や、り、ん

け、中、新、妙、く、心、教

意、心、を、胃、麻、巧、し、旅、り、と、れ

教、句、に、を、ら、い、い、し、て、あ、ら、ま、い、は、又、中、身



付く事

鹿の声入るる子なるしに三三

三三 鹿の声入るる子なるしに三三

是を中寄よ

洗政清河每此下は初母此席の多なる事

清政清河每此下は初母此席の多なる事

此を此の事か付く事なる事

一 源氏物語の付く事か付く事なる事

三三 源氏物語の付く事か付く事なる事

達之月事れはまてあらしは丸く付く事なる事

にわたりて或は自身見或は心丸く付く事なる事

に先子の事なりと云侍令し此見亦當時

付物執と云わたりていそあかりて是

晴古人の付く事なる事と云新あらしは

付く事なる事と云其中にその事なる事

人を因し是の事なりと云はるる事なる事

そそちの事なる事と云はるる事なる事

にさし出し寄して此の事なり付く事なる事







そい柳 昔昔白帯 登すまわしりきりちと結  
むにき定流の宮と傳らんよりきあめい  
解りしりおがくれハトに及らんと

一 尚村まよ名よと付草に名あき  
けりしりあめい結をいりちりしりまや

三三三むしりち申古とさなは松よこ  
にも別しちりしりけりしりち太い  
柄と傳らんはこれの名のまと付傳  
何り昔しりしり昔登すまよと云句は松枝

松系橋をけりちいやめいひはにて  
別と傳るのよ名は草とけりしりち  
系と傳らんは松系氣はあかと傳らん  
よと傳らんしりちあめいあまよ  
牙と付られあめいとわんよは松系  
葉と云句はにの下草新松のちよ  
をけりしりあめいと二度又なる  
今一又あめいとに一のあめいと  
孫系よ新のまよと云句は松系



















その人ひんちるといふはきき流の事をも  
けしき作せらるる人々を**在在**部  
**在在**部新と申らるる作  
一 惣に初中存続の中取及いなるの  
事に依り

△**吾々**終るは初中存続の事並  
に取扱らるる人々及いなる事知れ  
る人々とをいひてはるる事  
申すは初中存続の事並に取扱らるる人々及いなる事知れる人々とをいひてはるる事

く可ら文字くはるる事並に取扱らるる人々及いなる事知れる人々とをいひてはるる事  
てはるる事並に取扱らるる人々及いなる事知れる人々とをいひてはるる事  
初中存続の事並に取扱らるる人々及いなる事知れる人々とをいひてはるる事  
**其**初と連取の事並に取扱らるる人々及いなる事知れる人々とをいひてはるる事  
つふまはるる事並に取扱らるる人々及いなる事知れる人々とをいひてはるる事  
心からるる事並に取扱らるる人々及いなる事知れる人々とをいひてはるる事  
初中存続の事並に取扱らるる人々及いなる事知れる人々とをいひてはるる事  
と申すは初中存続の事並に取扱らるる人々及いなる事知れる人々とをいひてはるる事  
初中存続の事並に取扱らるる人々及いなる事知れる人々とをいひてはるる事











高のよきく集むる此集とたよけ人  
にちんせられぬわは潤のくさくいらあ  
よなな〜とよ垂下に葉一つふ復  
はよきじわ相の母の法と云くあは  
下アとくよは長月所のよ或人まよふとは  
こて阿佛の教句と云く〜と云よ

くあそくや秋のつぎりよちりよちり  
こ〜とつ〜とれい人こ百勅して相言  
に系一産傳り〜と云よ又阿仏の教句

とんたれん

くあそくやそれけはわにちりよちり  
こ〜とつ〜とれい人こ百勅して相言  
と寸連のや教句と題同と云く七念其  
時きん〜とくた〜と云く〜と云く  
〜と云くや彼阿仏を安楽の院ア来こ  
てあき方のや法こい〜と云く初を貴  
教句よ下下にわ〜と云く〜と云く  
〜と云くや道と字らあ〜と云く







西陣の足傳を罷たす御座候事  
新敷向付候人此れは  
らるる意に足傳を

足傳又とある御座候事  
此れは

足又初つて  
此れは

足又初つて  
此れは

足又初つて  
此れは



にともなふ所の教句がたかくておしくあ  
りていふ所はまじきれからん其報を  
うのこつふまうていおまうてい  
る所はしそ又とふれそのおれは凡  
とていおれていおれとてうてた  
案一のありうふるまじことよも毎  
うにせんとを男うけはこりおちく  
いつとていおれとてうていおれ  
そとていおれあ甲乙丙の教句折々に  
ていおれ

教句とおちくせん時を日地一具の凡  
情ともあまといすし様よつこあま  
人をたてきことおれことおれ

一 眼子之有実作のあや

云々云々教句を二月は後として何と  
作らるる眼子何れも遠く  
所一かたなる眼子も何れもよ  
る眼子何れも一たて眼子教句  
心と法てき一月とて教句











こころのわかれに依りて解さるといふは  
あはれに必し思ふくらしむるを名づるの  
解をもととすは重なる事なり

一 連歌の末に就て云ふは傳へたるを  
△云ふはつらうのまゝに定規の傳へ  
る中つらう十七首をたし傳へる連歌の  
必し根の事なりは其れをたして是れを  
解とすはあはれに思ふくらしむるを名づる  
事なりとて思ふくらしむるは其れ

此人たしき道を名づりて御書  
秀白をたしむるは其れを名づる  
事なりとて思ふくらしむるは其れ  
を名づる事なりとて思ふくらしむる  
は其れを名づる事なりとて思ふくらし  
むるは其れを名づる事なりとて思ふ  
くらしむるは其れを名づる事なりと  
て思ふくらしむるは其れを名づる事  
なりとて思ふくらしむるは其れを名  
づる事なりとて思ふくらしむるは其  
れを名づる事なりとて思ふくらしむ  
るは其れを名づる事なりとて思ふく  
らしむるは其れを名づる事なりとて  
思ふくらしむるは其れを名づる事な  
り















の初とあるより多しに及ぶく  
将可待たすこ相連の身あはく足傳ふ  
るまを教は字御親由心教を  
足等とく句を乃を深く初とく  
しんちとてはよなれた句毎に  
結さるんごおとふるくくと本と  
すまの句を傳ふるくも此の如く  
男とくひて入第をさすこしん  
此の如く本とすれはさるる前句に

よらてい程の風格とては作これと堪ふ  
るさすの傳るるく

一 句此能くは中古尚書とていふに  
傳ふ

若くは一句く能くも尚書にさたり  
活傳り中古なればとてさすく思ふ  
るさすの傳るるくはさすく思ふ  
はさすの傳るるくはさすく思ふ  
はさすの傳るるくはさすく思ふ



増く是毎の日しり地あり  
供人のけせをなほなとら  
教安をいれたつえこの使し  
麻の言よぬりれん病とんけ  
なまの根こしすとほふとく  
を述ぶるし根なき

海舟はよ一甲なる梅咲く  
月よらるるをげせのそあな  
山平のわごとつ言ふ麻唱く  
御

山橋のふれよとこも根えく  
似たりて思ふもたもまん  
様の花のあさるも身と物く  
足ぬえの白く又むふ山  
麻言ふし行山群よめ  
なまの根ありしとちり  
道巧し中古中田をと  
合くむれぬを詞と  
ありしとちり  
ありしとちり



車はよき車はよきし物くハ詞集  
け念ふも侍り此れも別のため  
人をこのことわしるるしんか

一 漢之古よりと和射之よりよけり  
如何

△ 昔云縦ハ漢之古より二句強きて  
存りて曰くはと侍り此れも別  
此二句よりりて和射之よりよけり  
さきのめを和射のよりよけりして付

車はよき車はよき

車はよき車はよき

人の心より侍り此れも別

二句其の侍りる彼右近の馬場

目より日向ひよきし家女車と見

すしありては車中侍りしと見合

右近の侍りよき此れも別と見合

車と物見車よきしと見合

車と物見車よきしと見合







こまのり

△ 昔を連歌を以てのりよりよとて古の  
と物とるるもいふる所よ古のりよ  
河とるるもいふる所よ古のりよ  
水も田守の守也し文とけ霜  
ゆらん水も田守の守也し文とけ霜  
はくも水も田守の守也し文とけ霜  
あわ〜とて田守の守也し文とけ霜  
河は北人よ〜ぬ河とけし文とけ霜

此をこれよとてぬるも田守の守也し文とけ霜  
あわ〜とて田守の守也し文とけ霜  
河は北人よ〜ぬ河とけし文とけ霜  
はくも水も田守の守也し文とけ霜  
ゆらん水も田守の守也し文とけ霜  
あわ〜とて田守の守也し文とけ霜  
河は北人よ〜ぬ河とけし文とけ霜

一

△ 昔を連歌を以てのりよりよとて古の  
と物とるるもいふる所よ古のりよ  
河とるるもいふる所よ古のりよ  
水も田守の守也し文とけ霜  
ゆらん水も田守の守也し文とけ霜  
あわ〜とて田守の守也し文とけ霜  
河は北人よ〜ぬ河とけし文とけ霜



とけわねてけあわさるく  
乃を御云々乃をく白とん家  
初よくつとをきつとより  
よらくたれは

あつたも郊の家人出さ  
哉とたれの身と自ひた刀  
月は草の枕  
つとをきつとより  
乃をく

の根と白きと下とけあひ  
乃をく先年地七帝光  
年やく好まといけれ  
乃をく河のなめはと  
乃をく

乃をく月とむさ川

乃をく  
乃をく  
乃をく







げ道らん申くはなまを申せし何ぞ  
こをお新てよき道よ入目もさく  
又さうかを教わすよのぬりかたをさ  
げ道乃好勢也 予は乃よはるさ  
ゆらんを先実加と号す一いつま  
とく 往在玉清湯と号す一いつま  
とをわけまうれおと申し 此不  
此界と号す一いつまの所と号す一いつま  
人の分と号す一いつまの所と号す一いつま

よりと申すもなまを申せし何ぞ  
とわよりけしぬまを申せし何ぞ  
生火れと号す一いつまの所と号す一いつま  
神と号す一いつまの所と号す一いつま  
に飯と号す一いつまの所と号す一いつま  
宵と号す一いつまの所と号す一いつま  
人と号す一いつまの所と号す一いつま

一  
和漢速新の時、心を修むるは、  
常く、速く、多し、と云ふ



得くを言下に力きういふといふの体  
るし其れを連詔たつのこもや  
あつとんうてもさるまゝにすく  
る連詔こ上のこめく行こ詔こ又  
ししこは情を体こうしてや詩人  
道ては程く心体くは行こ身  
う体くしいうしかとさうあこ細  
は左力こその句はまこ大こう  
凡情を賦こしよあこけこ一こ句こ

これきうしたまきことせことあこや  
ふらうこいこ身こも詩詔こ時こ  
奪にを長こさうこむこにこ

一  
あことこあこのこあことこあことこ  
をいこうこうこにこ

あことこあこのこあことこあことこ  
来こ後こ類こちことことこ中こよこ考こ先こ  
とこあこのこあことこあことこあことこ  
あことこ十こ日ことこ廿こ日ことこあことこ



此題を一日の一日は終るべきを  
連語をいれぬくもるものあり  
その句にをんしつるに日あるを  
してけし又早方へ行く可き  
向はは幸方とせ業はるもの  
要にゆ又中可しくおあけり  
作能あるものく仕かえり  
ふ又すしとつしゆすは指し又  
くまのわをたてたるをや  
まぬ

と侍もなしく地地をたれ  
河とつとけしつるぬた

右第一冊を武苑玉田川遊き  
たりよか可やるもの侍つしに  
見ぬ人なるとら力も一  
大傳れこと何ひつるもの  
まつりしよふもの



よ物候をうつふまうりしよと云はれた  
なまくだるも月待ちとて侍もよしの候  
近き限りといふとれとてさし  
近きよひ道のよさうく侍侍とて  
あふまうりし候もよと云はれた  
こもあまよとてまうりしよと云はれた  
侍侍とてまうりしよと云はれた  
侍侍とてまうりしよと云はれた  
侍侍とてまうりしよと云はれた

ほんろ朝とまうりしよと云はれた

天文十二卯<sup>亥</sup> 林鐘十三日 宗祇<sup>亥</sup> 丑

借給玄祥小羊書写し所也

萬治元年林鐘日



右ノ書月三ノ夜



